

イスラエルを回復する真の牧者の約束

【聖書箇所】 エゼキエル書 34 章 1 節～35 節

ベレーシート

●イスラエルの回復のためには真の牧者が必要です。1～10 節までは「イスラエル牧者たち」、つまり、指導者たちに羊に対する責任を託したにもかかわらず、自分たちの利益を優先してその責任を果さなかったために、そのことが非難されています。民の上に置かれた権威ある者たちは神の代理者として民の利益が損なわれないように、またその必要が満たされるように、民の世話をする義務がありました。しかし現実には、民の幸いを求める代わりに、むしろ彼らを搾取したのです。羊たちを養うのではなく、自らを肥やしたのです。それゆえ、イスラエルの民は近隣諸国の民の餌食となり、敵の攻撃の結果、地の全面に散らされてしまったのです。そこで、主なる神はイスラエルの民を再び集めるために、主ご自身が牧者となることを預言したのがこの 34 章です。

1. イスラエルを回復させる真の牧者

【新改訳改訂第 3 版】エゼキエル 34 章 11～16 節

11 まことに、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。

12 牧者が昼間、散らされていた自分の羊の中において、その群れの世話をするように、わたしはわたしの羊を、雲と暗やみの日に散らされたすべての所から救い出して、世話をする。

13 わたしは国々の民の中から彼らを連れ出し、国々から彼らを集め、彼らを彼らの地に連れて行き、イスラエルの山々や谷川のほとり、またその国のうちの人の住むすべての所で彼らを養う。

15 わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。——神である主の御告げ——

16 わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のをカづける。わたしは、肥えたものと強いものを滅ぼす。わたしは正しいさばきをもって彼らを養う。

●ここに記されている預言はやがてダビデの子孫イエス・キリストによって実現しますが、注目すべきことは、ここで「わたし」、つまり神ご自身が自分の羊に対してなされる慰めの動詞です。

牧者動詞	原語読み	原語表記	その他
捜し出す	ダーラシュ	דָּרַשׁ	(熱心に)尋ね求める、探す、尋ねる
世話をする	バーカシュ	בָּקַרְתִּי	ピエル態。気をつけて調べる
養う、飼う	ラーアー	רָעָה	羊たちは「草を食べる」
連れ出す	ヤーツァー	יָצָא	ヒフィル態。
救い出す	ナーツァル	נִצַּלְתִּי	ヒフィル態。取り戻す
集める	カーヴァツ	קָבַץ	ピエル態。
連れて行く	ポー	בֹּא	ヒフィル態。運ぶ、連れて来る
いこわせる	ラーヴァツ	רָבַץ	横たわる、伏す
連れ戻す	シューヴ	שׁוּב	ヒフィル態。迷い出た羊を連れ戻す
包む	ハーヴァシュ	חָבַשׁ	他に、いやす、巻きつける、包帯する
カづける	ハーザク	חָזַק	ピエル態。他に「強くする、勇気づける、堅固にする」

●特に、11 節だけに注目すると、「見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする」とあります。この約束を果たすためにイエスがこの地上に遣わされたのです。

2. イエス・キリストによって実現された 34 章の約束

●エゼキエル書 34 章の預言はイエス・キリストによって実現しました。新約聖書の福音書ははっきりとイエスの来臨の目的が記されています。イエスはこう言われました。

「わたしはイスラエルの家の滅びた羊以外のところには遣わされていません。」(マタイ 15:24)と。換言すれば、イエスはイスラエルの家の滅びた羊のために遣わされた」ということです。このイエスのことばは、神の救いを個人的に考えている人には理解できないことばです。というのは、私たちが置換神学(※脚注)の影響を強く受けているために、「イスラエルの家」を文字通りではなく、個人的な自分に置き換えてしまっているからです。イエスの語られたことばは正確に理解されなければなりません。文字通り、神の約束された「イスラエルの回復」の成就がなされなければ、神のみことばの約束の信ぴょう性は希薄なものとなってしまからです。

●メシアニック・ジューの神学者でデビット・ルドルフという方がいます。彼は個人の救いをあまりに強調する現在の福音派の問題点について指摘しています。個人の決意と個人の救済という視点からだけメッセージを語ると、(一世代前の人にしか分からないたとえかも知れませんが)「傷ついたレコードのように、創世記からヨハネの福音書 3 章 16 節に針が飛ぶ」と言っています。そうではなく、むしろイスラエルを中心とする「物語」として福音全体を語ることの重要性を強調しています。

●「**イスラエルの家の滅びた羊**」とは、**神の民イスラエルのこと**です。イエスの来臨は旧約で約束されたことを実現するために来られたのです。イエスが誕生した地は預言されたベツレヘムでした。ここに誕生されるためには全歴史が動かされて絶妙なタイミングで実現したのですが(⇒このことについては、こちらを参照)、育ったのはナザレ、そして最初の宣教地はガリラヤ湖の付近でした。主イエスが来られたのは、文字通り「全地に散らされたイスラエルの民を集めるため」です。それゆえ主はガリラヤから宣教を開始されました。

【新改訳改訂第 3 版】マタイの福音書 4:14~17

14 これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、

15 「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。

16 暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。」

17 この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

●イエスが宣教を開始された「ゼブルン、ナフタリの地」、そしてイエスはその地からご自分の弟子を選ばれ、活動を開始されたことは決して偶然なことではなく、すでに預言されていたゆえです。それゆえ、イエスは「大群衆を見て、羊飼いのいない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかかわいそうに思われた。」(マタイ 9:36)のです。そして、12 使徒を呼び寄せて彼らを遣わしますが、そのときイエスは、彼らに「イスラエルの家の滅びた羊のところへ行きなさい。」と命じます(マタイ 10:6)。

●イエスの語られた「たとえ話」の中にしばしば使われる「失われた」ということばがあります。たとえば、ルカの福音書の 15 章には三つのたとえ話があります。そのたとえ話の中心的なテーマは「いなくなったもの」「いなくなった羊」「なくした銀貨」「いなくなった息子」です。そこにある共通の語彙はギリシャ語で「アポッルミー」(ἀπόλλυμι)という動詞で(その分詞が形容詞的に使われていますが)、それは「滅びた」という意

味です。つまり「滅びた」羊、「滅びた」銀貨、「滅びた」息子なのです。これらが見つかるまで捜して(あるいは、待って)、見つかるという話です。放蕩息子を妬む兄息子に対して父はこう言いました。「いなくなっていた(滅びていた)のが見つかったのだから、喜ぶのは当然ではないか」と(ルカ 15:32)。

●ルカの 19 章に「取税人のザアカイの救い」の話があります。イエスが熱心に彼を捜して出会うのですが、この話の最後にこう記されています。

【新改訳改訂第 3 版】ルカ 19 章 9～10 節

9 イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。

10 人の子は、失われた(滅びた)人を捜して救うために来たのです。」

●ここでの重要なメッセージは、ザアカイが救われたのは彼がアブラハムの子であったことと、彼が「イスラエルの家の滅びた羊」の一人であったことです。しかし多くの人々(エルサレムの指導者たちのみならず、民衆も)は、このイエスのことばの真意を正しく理解する者はいませんでした。ちなみに、ザアカイのいた町エリコは、かつてアッシリアによって滅ぼされた地でした。